

## 作者の言葉



「こわれた千の楽器は今も私に語りかける」

野呂昶

もう三十年も前のことです。ある時、私は大阪の運河沿いの道を歩いていました。イチョウの金色の枯葉が降るように落ちていました。古びたレンガの造りの倉庫がつづく中に、ふと「楽器倉庫」と書かれた小さな看板が目にとまりました。なにげなく窓をのぞくと、そこにはこわれた楽器たちが無造作にくもの巣をかぶって置かれていました。ピアノや太鼓やコントラバスやバイオリンなどが、ほこりをかぶってなんとも無残でした。

「ああ、ここはこわれた楽器の倉庫だな。」

と私は思わず一人ごとを言いました。するとその時、楽器倉庫からなにか痛いような視線を感じました。私はあわてて窓からはなれましたが、私が言ってしまった言葉が胸につかえて、しばらく暗澹となりました。というのは、そのころの私は、非行少年などの教育施設に勤めていて、世の中の人々から白眼視されたり蔑視されている子ども達と生活を共にしていたからです。「こわれた」などという言葉は、日常生活の中で、けっして言っていけない言葉でした。「働きつかれて、少し休んでいるんだ。」

私は言い直していました。

## (中略)

「欠点ばかりでいいじゃないか。」

「勉強ができなくなっちゃっていいじゃないか。」

と私は言いました。

「ほんの少しでも長所があれば、みんなでそれを持ちよって協力して暮らしていこうじゃないか。」

「勉強もほんの少しずつでも、分かれるところを積み上げていけばいいじゃないか。」

私のそんな言葉にかかわらず、子ども達はいったん私を信頼すると、ぐんぐん人間的に成長して、それがかつての非行少年だったとは思えないほど、すなおで正義感ある素晴らしい子どもになるのです。

童話「こわれた千の楽器」は、私のそうした子ども達との生活の中から、いつとはなく生まれてきました。

「足りないところをおぎないあって、みんな協力して、楽しく生きていこうじゃないか。」

今も楽器たちは、物語の中から私にそう語りかけてきます。

(東京書籍 新しい国語 4年 上)

